INMP

MUSEUMSFORPEACE.ORG

INMP 通信38号 2023年4月

INMP

INTERNATIONAL NETWORK
OF MUSEUMS FOR PEACE
NEWSLETTER

ISSUE #38

INMPについて

国際平和ミュージアムネットワーク（*INMP*）は、平和な世界の構築に尽力するミュージアムと関連プロジェクト、そしてそれらを支援する組織や個人のグローバルなコミュニティです。平和のための教育を推進し、平和の文化を構築し、地球規模の環境・平和を促進するために、平和のための博物館（および関連組織）間で知識、資源、素晴らしい活動を特定、共有、普及するために活動しています。

INMP NEWSLETTER EMAIL
inmp.news@gmail.com

INMP WEBSITE
http://museumsforpeace.org

@museumsforpeace
@museumsforpeace
@inmp_museums_for_peace

INMP

INTERNATIONAL NETWORK
OF MUSEUMS FOR PEACE
NEWSLETTER

ISSUE #38

原稿の提出について

INMP通信39号 (2023年９月発行)

39号の投稿締め切りは、2023年7月15日です。
編集長の Kya Kimまでメールで原稿を送って下さい。
inmp.news@gmail.com

次のような原稿をお待ちしています。

＊平和に関連する問題やテーマに焦点を当てた簡潔な記事（500字以内、jpg画像3枚まで）
＊INMP会員の博物館からのお知らせ（展覧会、平和教育イベントなど）（500字以内、.jpg画像3枚以内
＊出版、論文募集、平和関連会議、助成金・プロジェクト、奨学金などのお知らせ（250字以内、.jpg画像3枚以内）
＊出版・書籍のお知らせ（250字以内、.jpg画像3枚まで）
＊平和に関するアートワーク、詩、写真。

INMPニュースレターは、日本語とスペイン語でも配信しています。
.https://inmp-news.museumsforpeace.org/

本ニュースレターの記事は、執筆者の見解を示すものであり、必ずしも編集チームや平和のための博物館国際ネットワークのメンバーの見解ではありません。

購読はこちらから

https://forms.gle/jdxR5mng3d7qqK1v7

INMP

INTERNATIONAL NETWORK
OF MUSEUMS FOR PEACE
NEWSLETTER

ISSUE #38

2023年４月

目次

ROBERT KOWALCZYKによる表紙
JOHN O'DONOHUEによる「平和のために』（詩）・・・・・・・・・5
IRATXE MOMOITIO ASTORKIAのメッセージ・・・・・6
INMP 国際会議（ウプサラ）・・・・・・・・・・・・・7
ウェビナー（テヘラン平和博物館）・・・・・9
戦争のイメージは子どもの手の届かないところに・・・10
不屈館 11
2022年ノグンリでの国際平和会議・・・・・12
トラウマの遺産を問う・・・・・・・・・13
ブラッドフォードでの平和の歴史・・・・・15
日本での平和博物館全国交流会・17
すみだ郷土文化資料館・・・・・・・・・・・・・・19
ひめゆり平和祈念資料館・・・・・・・・・・・・20
ドイツにおける国際歴史フェスティバル参加報告 21
中帰連記念館・・・・・・・・・・・23
デイトン国際平和ミュージアムでのインターン活動・・・・・・・・・・・・・・・・・24
博物館における女性：語られない物語・・26
コスタリカの平和博物館・・・・・・・・・28
カンボジア平和ギャラリー・カフェ・・・・29
RELIQUARIUM・レリクアリアム・・・・・・・・・・30
世界の家プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・32
平和グローバルアートプロジェクト・・・33
学校と世界における平和の創造・・・35
世界における平和のための博物館・37
LIVING PEACE MUSEUM〔出版物〕・・・・・・・38
RELINQUARIUM:ナショナル・プライドと平和についての見解（出版物）39
ロイ・タマシロ〔出版物〕・・・・・・・・・・・40
イタリアの平和博物館 41
最後の画像 BY ROBERT KOWALCZYK

INMP 通信編集チーム
KYA KIM〔編集長〕, 山根和代〔INMP顧問〕
ROBERT KOWALCZYK　安斎育郎〔INMP顧問〕
日本語訳：赤松敦子、寺沢京子、山根和代
スペイン語訳：IRATXE MOMOITIO ASTORKIA

表紙画像：Robert Kowalczyk
この言葉とともに：

意識である平和は
心の無限の構造の
内にも外にも存在する。

平和のために

昼の熱気が黄昏に向かうにつれて静まっていく。
私たちの中で緊張しているものが、すべて和らぐように。
私達は今日暴力に苦しんだすべての人のために祈ります。
予期せぬ平穏が彼らを驚かせるように。
平和のために日々命をかけている人たちのために。
彼らの心が、歴史の中心にある摂理を垣間見ることができるように。
暴力と戦争で富を築く者たちが
失われた者たちの叫びを夢の中で聞くことができるように。
互いへの恐怖の奥に
侵略へと人々を引き寄せる破滅的な力を癒す新しい未来像を見ることができるように。
平和の特権を享受している人たちが
苦悩する兄弟姉妹のことを忘れないように。
狼が子羊と一緒に横たわることができるように。
私たちの剣を打ち直して鋤とすることができるように。
そして聖なる山沿いのどこであろうと
何も傷つけられず、害を与えられないように。

ジョン・オドノフ（アイルランドの詩人・哲学者）
書籍『ベネディクトゥス』より

翻訳：赤松敦子

入手先：https://johnodonohue.com/store

©JOHN O'DONOHUE
From his book, Benedictus

IRATXE MOMOITIO ASTORKIAのメッセージ

INMP共同代表

私たちは2022年、国際平和ミュージアムネットワーク（1992年ブラッドフォード、2022年テヘラン平和博物館）の30周年を祝うとともに、この30年の間に、世界中の平和ミュージアムのネットワークを構築するために取られたすべてのステップを思い起こすことで締めくくりました。平和主義者と研究者が平和のためのさまざまな博物館の必要性を考えるために開いた会合が、今では、世界のさまざまな地域（イギリス、日本、オーストラリア、イラン、スペイン、オーストリア、アメリカ、インド、オーストラリア、カナダ、ケニア、オランダ...）で、平和のための活動を行う何百もの博物館、博物館関係者、活動家、アーティストが集まる国際ネットワークに発展しています。平和のための活動を文化や博物館と結びつけ、次の世代のために遺産を残す必要性を訴えています。

新しい年が始まり、この新しいINMPニュースレターで2023年と春を迎えます。

ウクライナでの悲惨な戦争が始まってから1年、世界にはまだ多くの忘れられた戦争がありますが、平和の文化と人権の尊重のために活動している多くの博物館の日々の活動に注目し、苦しみと痛みを生み出すだけの人間同士の暴力の無意味さを認識することが、これまで以上に必要です。

そして、世界の平和のために多くの博物館が行っているこの絶え間ない活動は、多様性の尊重、元の所有者から無断で持ち出された物の脱植民地化、マイノリティの沈黙し見えない仕事、私たちの日常生活で常に重要な役割を果たし、その存在と職業的価値が--博物館の分野においても--十分に評価されてこなかった多くの女性の忘れられた役割に焦点を当てることに基づいていなければなりません。

このネットワークの一部を構成する平和のための博物館は、他のネットワークとのつながりを広げ、おそらくまだ自分たちを平和のための博物館だと考えていない新しい博物館を加え始めなければなりません。私たちのコミュニティにおける活動は、非暴力的な方法で、自然、文化、社会的遺産とともに私たちの宝物を守りながら、公正なバランスを模索する必要があります。この遺産は、私たちが博物館の部屋で展示し、将来の世代に見てもらい、評価してもらうためのものです。

平和の家とその素晴らしいチームの献身的なリーダーシップにより、ウプサラ（スウェーデン）とオスロ（ノルウェー）で共に過ごす日々に、私たちは再び出会い、抱き合い、アイデア、展示、プロジェクトを共有することができるのです！この夏（2023年8月14日～18日）、INMP第11回国際会議の最終詳細が準備されています。平和な国スウェーデンは、平和のための議論、アイデア、リーダーシップで私たちを迎えてくれるでしょう。

Iratxe Momoitio Astorkia
INMP共同代表

MUSEUMS AS PEACEKEEPERS FOR THE FUTURE

THE 11TH INTERNATIONAL CONFERENCE OF MUSEUMS FOR PEACE

FREDENS HUS (THE HOUSE OF PEACE), UPPSALA, SWEDEN | 14-16 AUGUST 2023

11回平和のための博物館国際会議

INMP会議のワーキンググループと
平和の家

第11回平和のための博物館国際会議が8月14日から16日までスウェーデンのウプサラで開催されます。早く到着すれば、8月13日のガイド付きウォークに参加することができます。

ウプサラ会議の後、ノルウェーのオスロへのフィールドトリップがオプションで用意されています。ノーベル平和センターやノーベル研究所などを訪問する機会を設けています。

この会議では、博物館が人権の擁護者、持続可能な社会のための教育者として、いかに積極的な役割を果たすことができるかに焦点を当てます。プログラムは、刺激的な基調講演、プレゼンテーション、パネル、ワークショップ、ネットワーキング、ソーシャル・アクティビティを組み合わせたものとなっています。

会議は、活動家、学者、専門家、学生、そして会議のテーマに関心のあるすべての人に開かれています。私たちは、参加者が分野や職業を越えて、自分の仕事やアイデアを共有できるような、歓迎される空間を作ることを目指します。

プログラムには、以下のようなハイライトが含まれます:
平和博物館の未来に関するラウンドテーブル・セッション
平和構築のための教育-平和教育・教育学の活用法に関するワークショップ
仮想平和博物館・展示の案内
Artivism - プロジェクトのショーケース
博物館や教育のデジタルツール
ホロコースト生存者の遺産を守り、彼らの物語を伝え続けるための方法についてのパネルディスカッション

会議の締切を延長しました!

4月17日 提案書提出の締切
4月30日 早期登録の締切
5月15日 報告受理の通知締切
/報告の拒否
5月31日 発表者登録の締切日

***報告が受理された発表者の方々には、できるだけ早くお知らせを開始する予定です。**

SUBMIT A PROPOSAL　REGISTER HERE

この会議では、以下のような興味深い人々に出会うことができます。

Gapminder - スウェーデンの博物館協会 - ミュージアムネクスト - NIOD (Instituut voor Oorlogs-、 ホロコーストとジェノサイドの研究） - ゲルニカ平和博物館財団 - ウプサラ市 - ブラッドフォード平和博物館 - ウプサラ大学 - クロスカレント国際研究所 - ひめゆり平和祈念資料館 - 南スーダンのアフリカ児童兵のコミュニティ平和博物館 - テヘラン平和博物館 - セントアンドリュース大学 - 平和のためのグローバルアートプロジェクト - 平和リソースセンター - 宗教と社会に関する学際研究のためのセンター - デイトン国際平和博物館 - ケニアのコミュニティ平和博物館遺産財団 - ウェブスター大学 - Peace Boat

UPPSALAについて

ウプサラはスウェーデンの4大都市のひとつで、ストックホルム・アーランダ空港から電車でわずか18分のところに位置しています。スウェーデン国内はもとより、世界中から学生が集まる活気ある大学の街です。現在、約22万人が暮らしていますが、その数は着実に増えています。

ウプサラは、しばしば「スウェーデンの平和都市」と称されます。スウェーデンの歴史的なノーベル平和賞受賞者5人のうち、4人が住んでいるのです： ヒャルマル・ブランティング、ナタン・セーデルブロム、アルヴァ・ミルダール、ダグ・ハマールショルドです。現在、ウプサラには、国際平和に強い関心を持つ多くの学術団体や市民社会団体が住んでいます。

平和の家

「平和の家」は平和博物館であり、2006年からダグ・ハマールショルドの精神に基づき、平和、人権、社会の持続可能性に焦点を当てた活動を行っているNPOです。

私たちは、平等を促進し、人種差別や不寛容に対抗し、紛争管理や積極的な市民権を訓練するために、草の根レベルで平和活動をしています。展示、教育活動、演劇、ゲーム、さまざまなデジタルツールを使って活動しています。主な対象は子どもや若者で、毎年、スウェーデン全土の学校で2万人以上の生徒と会っています。「平和の家」は長年にわたりINMPのメンバーであり、第11回平和のための博物館国際会議を主催することを光栄に思っています。
主催者からのお知らせです： フレデン・フースでは、近日中に奨学金や参加費の減免制度（新興国からの参加者や学生を対象）を開始する予定です。

Photo by David Naylor

REDEN HUSの詳細はウェブサイトをご覧ください。

第11回平和のための博物館国際会議の詳細については、こちらのリンクをご覧ください。

また、コーディネーターの連絡先は以下の通りです：
INMP.COORDINATORS@GMAIL.COM

平和のための博物館における平和を語る。(2022年12月6日)平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）30周年記念

MONA BADAMCHIZADEH

国際平和ミュージアムネットワーク（INMP）の30周年を記念して、ミュージアムメンバーであるテヘラン平和博物館（TPM）は、2022年12月6日に、このネットワークの設立以来の歴史と成果を独自の視点で紹介するハイブリッドウェビナーを開催しました。過去30年間、INMPは博物館の活動を通じて平和を促進する唯一のネットワークに成長し、多くの博物館が平和のために活動するきっかけとなりました。

ウェビナーは3部構成で、第1部はエリック・ソマーズ氏（平和史家）、第2部はシャリアル・カテリ氏（TPM広報・国際関係部長）、第3部はキャスリーン・コーガン氏（プロカウンセラー）がそれぞれモデレーターを務めました。このウェビナーでは、INMPの歴史や平和のための博物館の物語について理解を深めるだけでなく、テヘラン平和博物館について、その歴史、目標、活動、成果などを知る機会も提供されました。

Webinar Program

Part 1: Introducing the INMP: historical narrative

Satoko Oka Norimatsu	INMP Coordinator's Welcome Address	5
Erik Somers	Moderator	5
Peter Van Den Dungen	Founding of the INMP	10
Ikuro Anzai	A Congratulatory Message for the 30th Anniversary of the INMP	10
Clive Barrett	30 Years of INMP: A Personal View, from Bradford, UK	10
Video: Introducing the INMP		10
Kazuyo Tamane	Approaches to Display Peace in Museums for Peace Worldwide	10
Joyce Apsel	Looking Backward and Forward: INMP Publications and Critical Museums for Peace Studies	10
Ray Tamashiro	Conversations & Dialogues for Peace at Ten International Conferences, 1992-2022	10
Ahmad Salimi	Live music & Break	10

Part 2: Tehran Peace Museum's narrative

Shahriar Khateri	Moderator	5
Video: Tehran Peace Museum's story		10
Shahriar Khateri Mohammadreza Toghipour Moghadam Mohammad Hossein Shegarf Nakhaei Asadollah Mohammadi Farzaneh Nazari	Tehran Peace Museum's Narratives: Awareness Programs and Youth Activities Inspired by War Survivors Experiences (group presentation)	35
Break		5

Part 3: Present and future of the INMP

Kathleen Cogan	Moderator	5
Iratxe Momoitio Astorkia	The Future of the Museums for Peace: Working Together to Create Peaceful Bridges between Museums and Society in the 21st Century	10
Jesper Magnussen	Uppsala 2023	10
Kya Kim	Updates on INMP Newsletter	10
Kimberly Baker	Working Towards Peace and Harmony Among Diverse World Cultures and the Natural Environment	10
Eva Rodriguez Niestra	Love in Time of Corona: Starting a Peace Museum During a Global Pandemic	10
Junko Kanekiyo Eva Rodriguez Niestra Mona Badamchizadeh	Discussing Peace Heritage: What We Learned from Our Peace Heritage Webinar Peace on Earth: Treasures from INMP museums	12
Kimberly Baker	Culturally Responsive Education in the Classroom	5
Balkrishna Kurvey	Nuclear Weapon Free World and Role of Peace Museum: South Asia Scenario	10
Mona Badamchizadeh	Silk Rise: A Project to Introduce Museums for Peace	5
Iratxe Momoitio Astorika	Closing by the coordinator of INMP	2
Q&A		15

この重要なイベントでの会談を後日紹介するため、INMPとテヘラン平和博物館は現在、特別な電子出版物を計画しています。
テヘラン平和博物館の詳細については、ウェブサイトをご覧ください。Tehran Peace Museum http://www.tehranpeacemuseum.org/index.php/en/

戦争の映像は子どもの手の届かないところに

JEAN CLAUDE CUBINO

子どもの笑顔に勝るものはありません。 たとえその出来事を経験していなくてもトラウマになる可能性があるのですから、子どもたちが戦争の映像を目にすることを防がなければなりません。

戦争をしている国があることを子どもに説明することは、多くの人にとって、決して直面したくないことです。

しかし、子どもたちが戦争を理解できないようにするために、子ども時代を守る方法としてただ戦争に関して沈黙を守ることは、最良の答えではありません。

子どもたちは、理解する力はそれほど強くなくても、物事が起きていることはわかるという、素晴らしい観察力を持っています。

近年、戦争が起こり、更にまたもう一つの戦争が起こり、楽観主義の芽を摘み、進化を打ち砕いた時、私は戦争の残酷さを表現しながら、その存在に疑問を投げかけ、皮肉を使いながら内省を促すようなニュースのカタログを作成することにしました。

それは、色彩を失った子どものクリスマスのおもちゃのカタログに見せかけた教育ガイド、誰のものかわからない壊れたり捨てられたりした物のコレクションです。

大人には理解できない、子どもを支援するためのハンドブックは、不条理を極限まで追求することによってのみ恐怖の世界が表現されうるという結論に達するのです。この視覚的効果を持つ詩のリストは、子どもと一緒に戦争というテーマに取り組む際に生じるかもしれない疑問を単純化するために、子どもらしい誇張された熱意で、完全な失望を描写しています。 このハンドブックは、子どもたちが思いついて、他の人に感情を通して伝え始める間違った、そして適切とは言い難いメッセージやアイデアに対処するのに役立つ、信じがたいおもちゃたちを載せています。

なぜなら、遊ぶことは、開かれた心と社会的認識を持つことを促し、物事に感嘆する能力を象徴化するからです。

そのような経験をした子どもたちは、美や調和というものがあることを確信することになるからです。遊びの要素は、私たちを子ども時代に引き戻す、幸福と優しさの原則に基づいて物事に取り組むことのあらわれなのです。

Jean Claude Cubino は社会的排除や気候変動といった現在の問題に対して、一般の人々の意識を高めることを目的としたアーティストである。詳しくは、ウェブサイトをご覧ください。
https://jeanclaudecubino.com/obra-social-lo-invisible/　短い動画は、次のサイトでもご覧いただけます。
https://www.youtube.com/watch?v=vkyrHctItyM
https://www.youtube.com/watch?v=_l7AxHNVm7w
https://www.youtube.com/watch?v=ZbwXnHsiHGo

*Cubino*の「おもちゃ」の画像は、本号の*15*、*17*、*21*、*26*ページで見ることができます。

翻訳：赤松敦子

Adagio for Strings (Samuel Barber)
by Jean Claude Cubino

不屈館
瀬長亀次郎と民衆資料
仲本和彦

沖縄は、東シナ海で日本と台湾の間に浮かぶ島々で、第二次世界大戦の最終決戦の地として有名です。沖縄戦（The Battle of Okinawa）では、島に住む住民の実に四分の一が命を落とし、県民は「戦争が起きると、最も被害を受けるのは一般住民である」ということを身をもって体験しました。その結果、戦後沖縄の人々は「どんな理由があろうとも決して戦争はしてはいけない」という価値観を共有するようになりました。

「不屈館～瀬長亀次郎と民衆資料」は、2013年の開館以来、その戦争のない平和な世界の実現に向けて活動してきました。私たちは、そのような世界の実現のカギは、いかに民主的な社会を作れるかどうかにかかっていると考えています。と言うのも、去る大戦においては、日本、ドイツ、イタリアなどの国々では軍国主義、ナチズム、ファシズムが民主主義を駆逐し、戦争への道を突き進みました。現在でもウクライナに侵攻したロシヤや弾道ミサイルの発射を繰り返す朝鮮民主主義人民共和国など、「民主主義」を標榜していながら専制的な政治を行う国があります。
民主主義とは一体何なのでしょうか?
日本で最も有名な政治学者の一人である丸山眞男は次のように言いました。

世界には歴史、文化、制度によってさまざまな形態の民主主義が存在する。よって、本当の意味での民主主義とは、「できる限り民主的であろうとする絶え間ない努力の過程」こそに見出すことができる。

確かに民主主義は不完全かもしれませんが、私たちは社会全体が「民主的であろうとする絶え間ない努力」を続けることができれば、戦争は避けられると考えています。それを実践したのが、戦後27年に及んだアメリカ統治下の沖縄の民衆と瀬長亀次郎でした。

当時の米軍当局は沖縄で施政権を行使するにあたり、共産主義的な思想の持ち主を徹底的に弾圧しました。米国が沖縄で施政権を行使した理由が、アジアにおける共産主義の拡大阻止だったからです。そして戦前に日本共産党の一員だった瀬長は、米軍により徹底弾圧を受けます。ところが米国は瀬長の力を完全に見誤りました。彼は共産主義者ではありましたが、その本質はむしろ民族主義者であり、平和主義者だったのです。民衆は彼とともに軍事優先的な米国統治からの脱却を求めて闘い、1972年、ついに日本復帰を勝ち取りました。

私たちは、瀬長亀次郎や戦後沖縄の民衆運動から多くのことが学べます。

不屈館は瀬長亀次郎の遺志を受け継ぎ、これからも民主主義を守るために闘い、より平和な世界の実現のために邁進していきます。

2022年ノグンリでの国際平和会議

HYEYEON KIM

2022年12月5日から7日まで、永同多文化芸術センター（韓国忠清北道永同郡）で「朝鮮戦争とノグンリ事件72周年；より良い未来のための課題と挑戦」をメインテーマとして、2022年ノグンリ国際平和フォーラムが開催されました。そこでノグンリ事件の被害者と遺族が共に、過去の悲惨な記憶を思い出し、ノグンリ事件から学ぶべき教訓と価値を次世代に伝えるための方法を模索しました。

（ノグンリ事件とは、今から72年前、国連軍として朝鮮戦争に参加した米兵たちが、1950年7月25日から5日間、韓国中央部に位置するノグンリ付近で行った民間人虐殺事件を指す。

その際、アメリカ空軍の飛行機が500～600人の難民の隊列を爆撃し、およそ100人が殺された。そして、爆撃を免れた残りの難民は、アメリカ第1師団第7騎兵連隊の兵士によって3泊4日の間、ノグンリ双門橋の中に強制収容された。約72時間、彼らはトンネル内に閉じ込められ、銃殺された。全体で400人近くの罪のない非武装の市民が犠牲になった。）

今回のフォーラムは、新型コロナウイルスの感染爆発状況が続いていることから、ハイブリッド形式で開催され、さまざまな国や分野のVIPスピーカーやゲストがオンラインで、または現地でフォーラムに参加することができました。

特に、AP記者としてノグンリ事件を世界に伝え、その報道でピューリッツァー賞を受賞したチャールズ・ハンレーは、フォーラムのオープニングで「朝鮮戦争と歴史の脚本」と題する基調講演を行いました。さらに、世界の著名な平和学者や専門家が4つの様々なセッションに参加し、ノグンリ事件のような過去の悲惨な事件を克服し、より良い未来のために真の平和と和解を実現する方法について、素晴らしい考えと意見を交換しました。
また、フォーラムの主催者であるノグンリ国際平和財団は、フォーラム期間中に「平和音楽コンサート；小さな天使たち」、「平和展示」、「ノグンリ平和賞授賞式」などの様々な特別なイベントを用意しました。

この日、基調講演を行ったチャールズ・ハンレー氏には、初のノグンリ特別賞が授与されました。

ノグンリ国際平和財団の鄭求燾 Koodo Chung 理事長は、フォーラムの長い日程を振り返りながら、「ノグンリの国際化」を最も重要な使命として宣言し、「様々な平和・人権団体と同様に、多くの学者、ジャーナリスト、平和博物館館長、平和活動家がこの世界的な平和への努力に加わり、平和のための貴重なアイデアと洞察を共有するために共に活動し続けることを私は望んでおり、そうなることを信じております。ありがとうございました。」と述べました。

翻訳：赤松敦子

トラウマの遺産を問う

ERIK SOMERS
（NIOD戦争ホロコースト・大量虐殺研究所、アムステルダム）

国際的な環境の中で経験を分かち合い、新しい協力関係を築くことは、刺激的でやりがいのあることです。私は最近、ブエノスアイレスで「SPEME: ヨーロッパとラテンアメリカでの記憶の空間　トラウマ的遺産を問う」と題された国際協力プロジェクトに参加し、そのような経験をすることができました。このプロジェクトは、イタリア、オランダ、アルゼンチン、コロンビアの間で、戦争の記憶、トラウマ、遺産を研究する学術研究者と、記憶博物館や記憶の遺跡の分野で活動する専門家が交流する共同プログラムです。

このプロジェクトの基本的な目的は、記憶は、効果を発揮すると、現在と関連を持つようになる創造的な方法を生み出さなければならないという仮定の下に、トラウマの記憶を現在につなげる新しい伝達の形態を考案することです。そのために、さまざまなトラウマ的過去をどのように保存し、空間を通して伝えていくことができるか、また、どのような革新的行動が、過去に関する知識を向上し、現実の問題や社会の新しい課題への突破口となりうるかを調査するために、このプロジェクトでは博物館、旧収容所、記念施設など、さまざまな記憶の空間を具体的な調査対象としています。

関係職員の会議、理論に関する研修会、ワークショップ、現地調査、専門家による協議会が関係4カ国で開催されました。2022年11月から今年1月までは、アルゼンチンが開催国でした。主催協力団体は、アルゼンチン大学とブエノスアイレスにある記憶の博物館と遺跡(ESMA)でした。ESMAは、アルゼンチンの市民・軍事独裁政権の、「汚れた戦争」（1976年～1983年）として知られている時代に、最も悪名高い収容・拷問・抹殺センターでした。

当時、この場所で人道に対する罪が犯され、その残虐行為は現在も調査され、その犯人は裁判にかけられています。現在、この史跡は、記憶を風化させず、人権に関心を集めることを目的とした公共の場となっています。アルゼンチン、特にブエノスアイレスには、そのほとんどは若い男女だった3万人の人々が殺された当時の恐怖を思い起こさせる史跡がいくつかあります。

主な課題は、これらの場所でいかにして記憶を生かし続けるか、そして何よりも、いかにして現在を生きる世代に意味を与え、現在の国内および国際的な社会の発展と関連付けるか、ということです。この問題を解決するための出発点として、ESMAは、希望と闘争の場へと発展していきたいと考えています。

*T*ブエノスアイレスの*ESMA*の建物の前で、
オランダ代表団と*ESMA*代表者

それはつまり、人権を求める闘いの象徴、「記憶、真実、正義」（Memoria, Verdady Justicia）の場となるということです。計画を練り上げ、新たな知見を得るためには、他の同様の国際的な取り組みの経験が非常に役に立ちます。その例として、オランダの博物館では、ヨーロッパと東南アジアにおける第2次世界大戦の記憶が、最新の有意義な方法でどのように生かされているかということに関しての経験談が紹介されました。

ESMAにとって、ユネスコ世界遺産への登録申請が承認されることが、彼らの賞賛に値する志が認められるための重要な一歩となります。それが実現するかどうかは、近々発表される予定です。

ESMA、ブエノスアイレスの記憶の博物館と遺跡

Hood Room. Camilo del Cerro / MSME

Hood Room. Camilo del Cerro / MSME

SPEMEプロジェクトのウェブサイト：http://www.speme.eu/ および https://h401.org/2018/05/questioning-traumatic-heritage/ もご覧ください。

翻訳：赤松敦子

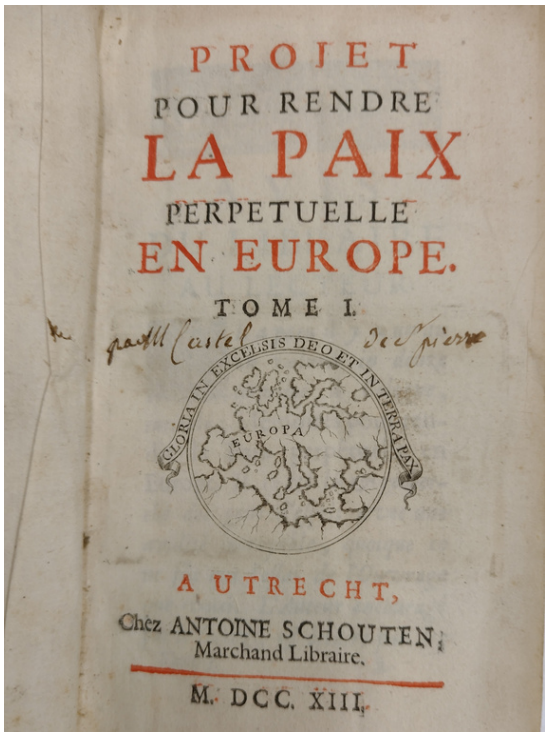
ブラッドフォードにおける平和の歴史

CLIVE BARRETT: クライヴ・バレット

英国ブラッドフォードにある平和博物館から、西洋における平和思想の発展を物語る貴重な遺品の数々が貸与されました。このユニークなコレクションは、平和思想とその実践の歴史を示すものであり、現在私たちが当たり前のように利用している、国際平和機関に関する初期の提案も含まれています。

このコレクションの中には、ヒューゴ・グロティウスの『戦争と平和の法』の最初の英訳版（1654年）が含まれています。この論文は、ヨーロッパの30年戦争中にラテン語で出版され（1625年）、国際法の基礎となる著作とされています。その他、1713年に出版されたサン・ピエール修道院長の『ヨーロッパに永遠の平和を確立するための計画』や、イマヌエル・カントの『永久の平和』の初版（1795年）などがあります。19世紀初頭のものでは、約300年前（1517年）に出版されたエラスムスの平和への嘆願書『The Complaint of Peace』の1802年の再版や、（ロンドン）平和協会として知られる恒久普遍平和促進協会の最初の年次報告書（1817年）などがあります。また、1849年にパリで開催された国際平和会議に出席した代表者たちの署名簿があり、議長であるヴィクトル・ユーゴーの署名が冒頭にあります。

グロティウス「戦争と平和の法について」*1654*年
[Photo: Clive Barrett]



サンピエールの「ヨーロッパに永遠の平和を確立するための計画」、*1713*年 *[Photo: Clive Barrett]*

また、世界初の平和博物館とされるスイスのルツェルン（Lucerne/Luzern）にある「Internationale Kriegs- & Friedensmuseum」のオリジナルガイドブック（1902/3）など、平和博物館の歴史を物語るアイテムもあります。

世界初の平和博物館（ルツェルン）のガイドブック
「*Führer*」（*1902*年）*[Photo: Clive Barrett]*

残念ながら、ブラッドフォードにある平和博物館は、来年に予定されている素晴らしい新施設への移転準備のため、現在閉鎖中です。移転時には、これらのアイテムの一部または全部が展示されることを期待しています。

ギャラリーは開いていませんが、私たちの最高のバナーのいくつかは、Mid Pennine Arts (https://midpenninearts.org.uk/projects/banner-culture/)から入手できる新しい本「Banner Culture」で見ることができます。また、当館は学校での平和教育にも積極的に取り組んでおり、昨年は数千人の生徒が参加しました。定期的な最新情報は、https://www.facebook.com/peacemuseumbradford/ をご覧ください。

翻訳：寺沢京子

冬 I （四季／ヴィヴァルディ）
by Jean Claude Cubino (see article on p.9)

日本における「平和のための博物館市民ネットワーク」全国交流会

山根和代: 平和のための博物館市民ネットワーク顧問

コロナ禍で2022年も市民ネットワーク全国交流会がオンラインで開催されました。また、総会を開催し、会則の決定と新役員の選出を行いました。市民ネットワーク代表の安斎育郎教授が退任し、2023年から顧問になられました。シルバコンパス代表取締役の安田晴彦氏による「AIによる戦争体験の継承の可能性――最新の「Talk With」制作状況など」の講演が行われました。平和資料館で活用されているAIについて知る良い機会となりました。以下、全国交流会での報告内容と、館長・学芸員が報告できなかった平和資料館からのお知らせを紹介します。

様々な平和博物館からの発表がありました。中帰連平和記念館、第五福竜丸展示館、東京大空襲・戦災資料センター、すみだ郷土文化資料館、女たちの戦争と平和資料館（wam）、東京ホロコースト教育資料館、満州農業移民記念館、ひめゆり平和記念館です。学術的報告は、すみだ郷土文化資料館学芸員の石橋星志氏による「日本各地における戦争体験の継承活動の現状」、早稲田大学非常勤講師の栗山究氏による「2022年博物館法改正内容の概要と現状と課題」の3件でした。また平和博物館の研究者であり、平和のための博物館市民ネットワーク共同代表の福島有行氏が、「2020-2022年の平和博物館・戦争関連展示施設に関する研究動向について」について、また「資料　平和博物館研究関連文献の分類」、「2020-2022年発表の平和博物館・戦争関連展示施設に関する研究文献一覧」を報告しました。

発表要旨は、ミューズ通信48号に掲載されています。また、オンラインミーティングに館長・学芸員が参加できなかったものの、ニュースレターには「草の家」「岡正治記念平和館」の記事も掲載されています。
INMPニュースレター38号では、短くなりますが、いくつかの記事が紹介される予定です。一つは、すみだ郷土資料館学芸員の石橋星志氏による「日本各地の戦争体験継承活動の現状」です。沖縄のひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳館長の「ひめゆり平和祈念資料館の近況と主体的な学びの開発と近況"ひめゆり平和祈念資料館の現状と自主学習の展開」も紹介されます。またコロナ禍における平和博物館の展示や活動についてもされます。東京のホロコースト教育資料センター代表の石岡史子さんが、ドイツ国際歴史フェスティバル参加報告を執筆されました。

発表要旨は、ミューズ通信48号に掲載されています。また、オンラインミーティングに館長・学芸員が参加できなかったものの、ニュースレターには「草の家」「岡正治記念平和館」の記事も掲載されています。

INMPニュースレター38号では、短くなりますが、いくつかの記事が紹介される予定です。一つは、すみだ郷土資料館学芸員の石橋星志氏による「日本各地の戦争体験継承活動の現状」です。沖縄のひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳館長の「ひめゆり平和祈念資料館の近況と主体的な学びの開発と近況"ひめゆり平和祈念資料館の現状と自主学習の展開」も紹介されます。またコロナ禍における平和博物館の展示や活動についてもされます。東京のホロコースト教育資料センター代表の石岡史子さんが、ドイツ国際歴史フェスティバル参加報告を執筆されました。
詳細はミューズニュースレター48号（https://aki.teracloud.jp/share/11b2b6688e591826）に掲載されています。平和のための博物館市民ネットワークの活動を知る良い機会になるのではないでしょうか。

砂糖の梅の妖精の踊り（チャイコフスキー）
ジャン・クロード・キュビノ（*P.9*の記事参照）
Dance of the Sugar Plum Fairy (Tchaikovsky)
by Jean Claude Cubino (see article on p.9)

日本各地の戦争体験継承活動の現状

すみだ郷土文化資料館
学芸員　石橋星志

戦争体験や講話を非体験者が継承する取り組みが各地で試みられている。本報告は、2018年調査（石橋、早川則男「日本における戦争体験継承活動に関する予備的考察」『アジア太平洋研究センター年報』2018-2019所収）の内容をベースに、一部に新たな情報を追加した。

伝承者・継承者等、体験者の話を受け継ぐ非体験者の養成は様々な試みがある。広島県広島市の被爆体験伝承者と、それに倣った東京都国立市のくにたち原爆・戦争体験伝承者育成プロジェクト。また、長崎県長崎市は、語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業として、家族または交流証言者と呼んでいる。ひめゆり平和祈念資料館は、次世代プロジェクトの一環で、説明員の採用など段階的に実行し、2015年3月に体験者講話を終了し、非体験者に引き継いだ。愛知県名古屋市のピースあいちでは、戦争体験の語り・語り継ぎ事業が進んでいる。昨年と今年の講話では、およそ体験者6割：語り継ぎ手4割になったという。

私の関与したものでは、東京都墨田区のすみだ郷土文化資料館で、体験者の紹介に代え、2020年から、学校の歴史と空襲体験者の証言と学区の空襲被害を学ぶ講演を実施している。多くは予め収録し、DVDで配布した。東京都江東区の東京大空襲・戦災資料センターでは、継承者養成プログラムの検討が続いている。昨年は国立市の見学や、広島長崎の伝承者からの聞き取りなどを実施し、今年度はプログラムの検討と試行を開始。体験者2名の継承者講話を8月に公開実施した。2023年度はガイドボランティアを対象に継承希望者を募り、養成講座を実施予定、その後、一般向けの募集・研修を計画している。最後に非体験者継承の課題と可能性についても言及し小括とした。

課題としては、伝承者などが修了後、特に体験者本人の没後、自己研修をどうするかも大きな課題だろう。それを自治体が担うか、専門家がどう関与するかなども難しい問題である。

人から人に継承する意義としては、証言映像やAI証言、カラー化写真・映像などは受け手を想定して作られるのに対し、伝承者などは、受け手とのリアルタイムの双方向的なコミュニケーションの可能性が開かれている。これまでの体験者の話も、このようなやり取りで疑問などが解消され、理解が深まることで「伝わって」いたと考えられる。

また、発信者と受け手には常に情報の差があるが、受け手に合わせた臨機応変な対応も人であれば可能である。また、非体験者は体験者ではないものとして、体験内容に適切にコメントすれば、受け手がどう受け止めるべきかの参考にもなると思われる。

ひめゆり平和祈念資料館の近況と主体的な学びの開発と近況

館長：普天間朝佳

コロナ感染が少し落ち着き、当館では今、修学旅行シーズンを迎えています。来館校はコロナ禍前のまだ60％しかありませんが、旅程の都合上、来館の時間帯がどうしても集中する場合があります。大きな団体が重なった場合、入館をお断りするケースも出ています。検温、入館時間調整、入場案内など、これまで以上に人手がかかり、職員は連日その対応に追われています.

今年、当館は「第11回 沖縄平和賞」を受賞しました。この賞はアジア太平洋地域の平和構築へ貢献した団体に贈られるもので、「沖縄における普遍的な平和思想の象徴的な存在として、戦争の悲惨さや命の尊さを伝えてきたこと」や「平和への想いを未来につないでいく活動を通して、アジア・太平洋地域ひいては全世界へ沖縄を平和の発信拠点として浸透させてきた地道な取り組みを行ってきたこと」が評価されました。

今年度、初の県内移動展を沖縄本島北部の今帰仁村、中部の読谷村で開催しています。同展は2021年にハワイでの開催が予定され、コロナ禍で中止となった「ひめゆりとハワイ」展が基になっています。開催地出身のひめゆり学徒を取り上げた展示もあり、沖縄戦やひめゆり学徒の体験をより身近に感じることができるなど、好評です。今後、機会を見つけ、ぜひハワイでも開催することを希望しています。

3年にわたるコロナ禍で、当館の入館者数はコロナ禍前（2019年度491,345人 ）と比べ、2020年度が14％（66,532人）、2021年度が19％（93,936人）にまで激減しました。今年度に入ってからは52％まで回復しています（11月は60％に上昇）。寄せられた寄付金は現在までに1億円余になっています。

コロナ禍で対面での平和学習が出来なくなる中で、当館ではオンラインによる下記の3つのプログラムを開発し、活用してもらっています。①平和講話「ひめゆりの沖縄戦」、②「絵で見るひめゆりの証言」、③オンラインガイドツアー。全て有料で、今年度上半期は27件実施しています。同時期の対面での講話・トーク等は70件でした。

主体的な学びの開発

現在、平和学習では戦争と平和の問題を「自分ごと」として受け止めてもらうために、主体的・能動的な学びの開発・実施が課題となっています。当館では、ワークショップ、ディスカッション、フィールドワークなどの手法を取り入れたプログラムを開発し、活用を始めています。 その中でも今回はワークシート開発と映像制作を通した学びの開発について報告します。

平和の礎

開発したワークシートは、「展示見学用ワークシート」と、「ひめゆり資料館×平和の礎ワークシート」の2種類です。見学用ワークシートは、気になった展示を選んで〇をつけ、選んだ理由をメモさせたり、沖縄戦で亡くなった学徒の写真の説明文を読んで問いに答えさせるというものです。平和の礎と関連付けたワークシートは、亡くなった一人のひめゆり学徒について調べ、その生徒の写真や名前を資料館や平和の礎で探すというものです（それ以外にも関連のワークあり）。

ひめゆり平和祈念資料館でのワークショップ

いずれも、自分で動いて感じ、考える学びができるのではないかと考えています。

また、映像・動画制作を通した学びの開発は、今、若い世代が映像や動画にとても興味や関心を持っているという状況を踏まえ企画したものです。その一つが“ひめゆり”を伝える映像コンテストで、今年度で5回目になります。昨年は10作品の応募がありました。これまでの受賞作品は当館のYOUTUBEチャンネルでご覧になれます。関連して、プロの映像プロデューサーを講師に映像ワークショップも開催しています。いずれの企画も、映像制作を通して、「ひめゆり」や戦争と平和の問題に関心を寄せるきっかけになるのではないかと考えています。

ドイツ国際歴史フェスティバル参加報告
NPO法人ホロコースト教育資料センター
代表　石岡史子

この秋9月に、ベルリンで国際歴史フェスティバルhistoCON(ヒストコン)が開催され、72カ国から250名の若者たちが集いました。日本からも15名の10～20代と共に参加してきました。主催はドイツの連邦政治教育センター(内務省管轄)です。1952年に設立されたこの機関は、ナチ時代と東ドイツの歴史を省みつつ、民主主義を確固たるものにするため、市民の政治参加を促すため、様々な教育事業に取り組んでいます。

histoCON 2022, Berlin

「歴史は、日々の政治の舞台に登場する。つまり私たちの暮らしと切り離せないもの。歴史を知ることは今を理解し、未来を形づくるために欠かせない。過去をふりかえり、未来を展望しよう」というスローガンのもと、4日間にわたって開かれました。第二次世界大戦とホロコーストの悲劇を経て、1945年を境に世界は何が変わったのか、何が変わっていないのかを「独立と依存」、「変化と継続性」、「紛争と平和」という三つの切り口から探求します。ウクライナとロシア、アフリカ諸国や中東、アジアの様々な視点から学び考えるための40のワークショップが用意されました。ゲームや料理、写真、絵画、コラージュ作成、街歩きなど、どれも身体を動かしたり、交流しながら異なる視点に出会えるような工夫がされていて、若者たちの弾ける笑顔が印象的でした。

当NPOでも「問いづくり」ワークショップを主催しました。アメリカの市民運動から生まれた「問いづくり」は、「問いの焦点」と呼ばれる問いを引き出すもの – 遺品や写真、引用文など – を観察しながら、問いをつくる、分類する、変換する、選ぶという四つのアクティビティで構成されるシンプルなワークです。今回は、BC級戦犯として裁かれた李鶴来(イ・ハンネ)さんの証言を「問いの焦点」として取りあげてみました。李さんの名前と出身国は隠して、A国(日本)の植民地であったB国(朝鮮半島)のルーツを持つ李さんが、A国の戦犯として裁かれたことをめぐり、参加者に思いつくままに問いをつくってもらいました。そして、その中から一つだけ「わたしにとって最も重要な問い」を選び、その理由を共有します。

さらに李さんの証言を読み進めて、ふたたび「決して忘れてはいけないと思うこと」を一人ひとつだけ選び、理由を話し合いました。チリ、ドイツ、ブルガリア、エジプト、アルジェリア、ウクライナなど多様なルーツの若者たちは、李さんのアイデンティティをめぐる苦しみや、戦後に母と再会できなかった悲しみ、補償と名誉回復を求める運動など、それぞれに共感したこととその理由を分かち合いました。二時間という限られた時間ではありましたが、若者たちはそれぞれに背負っている歴史や現在の社会課題、平和への思いに耳を傾け合いました。

他にも、興味深い取り組みとして、エジプト人夫妻による演劇ワークショップがありました。ブラジルのアウグスト・ボアールの「被抑圧者の演劇」という手法を用いたワークです。「抑圧者」と「被抑圧者」が登場する芝居をグループ毎に考えて即興で披露します。「観客」である他の参加者は好きなところで「ストップ！」と声をかけて劇を止めて「介入」し、自分が役者になって芝居の流れを自由に変えることができます。他の役者たちはそれにあわせてアドリブで進んでいきます。どこで、何を、どのように変えたら、抑圧構造を変革することができるか、皆で考えます。「介入」しないと、ふと「傍観者」でいる自分に気づかされます。

今回のフェスティバルで出会った博物館やNGOなどの様々な取り組みから学び、歴史実践の試みを今後も重ねていきたいと思っています。

histoCON 2022でのワークショップ
Image courtesy of Instytut Pileckiego

histoCON 2022での東京からの参加者
Image courtesy of The Mainichi

ワルキューレの騎行（リヒャルト・ワーグナー）
ジャン・クロード・キュビノ（*P.9*の記事参照））

ＮＰＯ中帰連平和記念館

芹沢昇雄

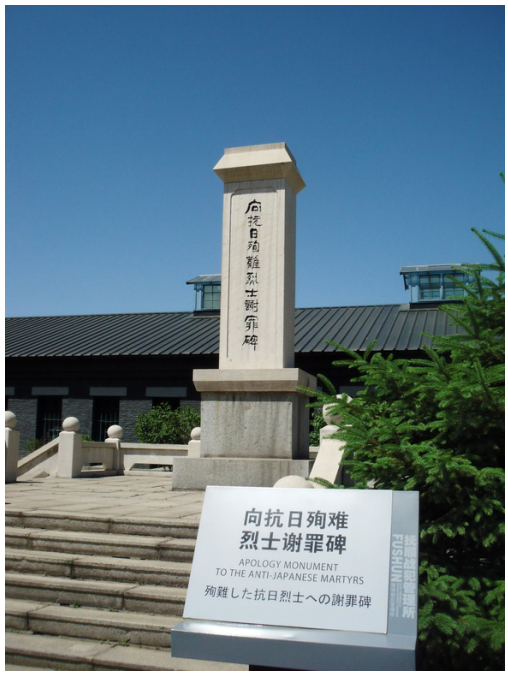
日本の平和運動は殆ど戦争被害を訴えていますが、私たちは日本が始めた侵略戦争の「加害」に焦点を当てて運動をしています。

中国で戦犯として6年間収容されながら、人道的に扱われ一人の死刑も無期もなく赦されて帰国した元戦犯約1000人の体験を知ってもらう努力をしています。それは、つまり「信頼関係を築いて平和を維持する」ということです。

日本人犠牲者310万人の一方で、中国の一般市民1000万人もが犠牲になっていることも殆ど知られておらず、日本政府は負の歴史を隠し「教訓」として生かすことをしません。

彼らは帰国後「中国帰還者連絡会」（中帰連）を組織し、自らの加害体験を証言し続けました。記念館はその皆さんのカンパで買ってくれた小さな中古のプレハブですが、内外のジャーナリストや研究者も来館し、ドイツ語や英語、ハングルなどで中帰連の本も書いて下さっています。

閲覧室



【NPO中帰連平和記念館】）
TEL&FAX：049-236-4711（水・土・日)
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
（臨時休館あり「事前連絡」お願いします）

デイトン国際平和ミュージアムでの研修

DANIEL HAGENHOFER　ダニエル・ハゲンホッファー

私の名前はダニエル・ハーゲンホーファーです。ドミニカ共和国のサンティアゴで生まれました。ドミニカ共和国の母親とオーストリア人の父親のもとで育ちました。2011年にオーストリアのウィーンに引っ越すまで、ドミニカ共和国に住んでいました。それ以来、家族と私はオーストリアに住んでいますが、どういうわけかオハイオ州デイトンに10カ月間滞在することになったのです。なぜデイトンでしょうか?

オーストリアの男性市民は18歳になると、国家奉仕活動をする義務があります。兵役、救急車、ホスピスなど、さまざまな選択肢の中から選ぶことができます。通常、10代は高校卒業後すぐにサービスを開始しますが、厳密には27歳まで時間があります。もし、何らかの理由で期限内に兵役に就けなかった場合、オーストリア国民としての権利を失うことになります。

16歳の時、オーストリア・サービス・アブロードという団体に出会いました。この団体は、異なる方法で国家奉仕を行う機会を与えてくれます。3つの道が用意されています。「記念奉仕」「社会奉仕」「平和奉仕」です。 私は即座に平和奉仕プログラムに参加することにしました。平和研究所や研究会の会議に何度か出席した後、世界に100以上ある施設の中で、デイトン平和博物館が最も興味深いと感じました。

この9月、私はついにデイトンの国際平和博物館でオーストリア国家奉仕を開始する機会を得ました。初日から、私は博物館のネットワークの一員として、あらゆるイベントに参加し、博物館の職員やボランティアの人たちと友好関係を築きました。毎日新しいことを学び、今まで知らなかった自分の才能を発見することができました。ビデオ編集やスピーチを楽しむようになりました。

12月には、ドミニカの伝統と経験を生かして、ドミニカ共和国とハイチについての講演をする機会を得ました。主なテーマは、この2つの国の間の歴史的な対立を説明することでした。50分にわたる講演は、読者にドミニカ共和国の歴史に関する新しい知識を与えるものでした。

現在、私たちは「ディスインフォメーション・エイジ」と呼ばれるプロパガンダの展示の開発に取り組んでいます。この展示では、プロパガンダ、ヘイト、誤報などのトピックに焦点を当てています。この展示の準備中に、私は、展示にどれほどの努力が払われているかに気付きました。資料の整理、各セクションの計画、スペースの測定、印刷物のリスト作成など、何度もミーティングを重ねました。

国際平和ミュージアムでの仕事を通じて、私は多くの経験を積んだと言わざるを得ませんが、オハイオでの私生活についても知っておくべきことがたくさんあります。デイトンに来る前に、IFIという留学生のためのキリスト教の団体と接触しました。彼らは週単位で多くの活動やイベントを提供しています。そのおかげで、世界中の学生と知り合うことができました。自宅から何千キロも離れているにもかかわらず、IFIと博物館のおかげで、アメリカでの帰属意識を持つことができました。

ミュージアムの中の女性たち。語られない物語

SYEDA RUMANA MEHDI

私の最も印象深い美術館訪問のひとつは、2022年1月、大切な友人とロンドンのV&A美術館に行ったことです。彼女は私に「ファッション・コレクション」を見せてくれることを非常に楽しみにしていました。1600年から現在までの約14000点のアイテムを取り揃えたこのコレクションは、衣服を通して、そしてより広く芸術を通して、性別の役割がどのように再現され、再強化されるかを驚くほど示しています。美術における女性、あるいは女性と美術について言及されるたびに、私はすぐに、ロンドンで過ごしたあのさわやかな冬の午後に誘われるのです。あの旅とファッション・コレクションは、私にとって非常に重要なものです。なぜなら、女性だけに焦点を当てたアートを見た初めての経験だったからです。そして、何世紀にもわたって女性がいかに客観視されてきたか、また、美術館の中で女性がいかに限定され、閉ざされた空間を持っているかを見事に表現してくれました。

考古学博物館を例にとってみましょう。原始時代に女性が狩猟に積極的に参加していた可能性が高いにもかかわらず、女性はほとんどすべての展示形態から排除されています。一般的な博物館、特に考古学博物館には、多様性を反映し、コミュニティの歴史と集合的記憶を保存する責任があります。しかし、博物館で見られるのは、ジェンダーロールの単なる再強化であり、ジェンダーロールは歴史を通じて停滞し、不変であるという問題のある物語です。

この問題は、展示に限ったことではなく、用語や社会階層の問題でもあります。「女性」という言葉は「もう一つの性」を意味し、このアイデンティティーの集まりは非常に問題です。「女性」というカテゴリーでは、有色人種や非異性愛の女性が業界に占める割合が驚くほど低いのです。MoMAのような有名な美術館がフェミニズムアートに力を入れるようになりましたが、フェミニズムのための闘いは、何層にも重なった玉ねぎのようなものです。

それでも、女性やその芸術を認め、評価する取り組みが世界中で行われていることは、心強いことです。2020年11月、カラチの有名な博物館であるモハッタ・パレスは、2020年3月の封鎖以来初めて、「Gaj: Colors of the Rainbow」と題したオープニング展を開催しました。この展覧会では、パキスタン全土の女性が行う刺繍に焦点を当て、年齢、社会的地位、結婚の儀式などに関するその意義が紹介されました。また、ベッドカバーや花嫁衣装の一部である伝統的なアイテムも展示されました。このような展覧会は、農村部や恵まれない地域の女性アーティストを前面に押し出すとともに、フェミニズムのための創造的な手段を提供することを目的としています。

博物館は、歴史を保存する場所であると同時に、未来の発展のための触媒として機能する空間でもあります。したがって、「もうひとつの性」の歴史、発展、未来についても説明されることを望むばかりです。

Syeda Rumana Mehdi： カラチのジアウディーン大学リベラルアーツ・人間科学部上級講師。詩や物語を媒介として、ジェンダーと結婚の人類学、政治的イスラーム、詩、南アジア文学などに関心を持つ。

翻訳：寺沢京子

ラデツキー・ハート（ヨハン・シュトラウス）
ジャン・クロード・キュビノ（*P.9*の記事参照）

THE コスタリカ大学平和博物館: 平和と人権に関する教育を通じて、国内および世界の平和文化を促進する。

DR. BERNIE ARAUZ CANTÓN

私の名前はバーニー・アラウズ・カントンBernie Arauz Cantonです。私はブラッドフォード大学の教員であり、最近設立されたコスタリカ大学の平和教育・人権講座の創立者でもあります。コスタリカ大学は私が設立しました。講座の活動の一環として、私はコスタリカ大学に平和博物館を建設する計画を立てています。コスタリカでの平和博物館の建設については、これまでにもいろいろな意見が出されてきました。しかし、今のところ、その構想は具体化されていません。

コスタリカには戦争の歴史はなく、軍隊もありません。コスタリカ人には、人権に基づく平和、民主主義、人間の安全保障、そして持続可能な開発の歴史があります。

憲法裁判所によると、平和は私たちの国民的アイデンティティの一部であるとのことです。また、憲法裁判所は、平和が憲法上の至高の価値であることを明らかにしています。また、国家における平和の追求は、すべての国家によって平和が尊重されるように、内的領域にとどまらず、外的領域にも拡大されることを確認しました。したがって、私たちは皆、平和の構築と達成に責任を負っているのです。

さらに、コスタリカの外交政策における5つの恒久的な戦略軸は、国家間の協調の中で、私たちの市民社会、平和主義社会、環境主義社会を構築するための政治的、法的基盤を形成しています。

・民主主義の擁護
・人権と基本的自由の促進、保護、尊重。
・平和、軍縮および国家、地域および世界の安全保障の推進。
・国際法の強化と効果的な多国間主義を発展させること。
・持続可能な開発の推進と、国際環境交渉における政治的調整と代表参加。

これらの軸は、平和主義社会としてのコスタリカの世界における立ち位置を定義しています。したがって、平和博物館は、平和と人権に関する教育を通じて、国内および世界の平和文化を促進し、貢献することになるでしょう。私は、平和博物館を建設するための条件が整っていると結論づけるしかありません。

このプロセスを通じて建設的な助言をくださる、英国ブラッドフォード大学平和学部の元講師、ピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲン博士に感謝しています。また、この取り組みを支援してくれる平和教育・人権講座の同僚の皆さんにも感謝しています。

このプロジェクトが終了した後は、INMPの協力、支援を求め、団体会員資格の取得を目指す予定です。

翻訳：赤松敦子

Dr. Bernie Arauz Cantón, FHEA
jacanton11@gmail.com

学習とは、知識が私たちに提示され、理解し、議論し、内省することで形作られるプロセスである。(パウロ・フレイレ)

カンボジア・ピースギャラリー 平和教育プログラム "ピースカフェ・プログラム"

RATANAK NA, カンボジア・ピース・ギャラリー・ディレクター・

カンボジアは、戦争から立ち直りつつある多くの国のひとつです。私たちは、何百万人もの人々を死に至らしめた約30年にわたる戦争を経験してきました。重要な社会システム、政治システムは破壊されました。戦争は、パリ和平協定を経て、1991年に終結しました。政府、民間人、宗教団体、非政府組織は、カンボジアを再建するために懸命に働いてきました。その中には、国民的和解を達成し、対立する派閥を再統合して平和的に共存させることも含まれています。それ以来、カンボジアに持続可能な平和を取り戻すために、さまざまな平和活動が開始されました。なぜなら、若い学生たちは、将来、平和な社会を維持するための偉大なリーダーや平和実践者となりうる、平和のための重要な資源だからです。そのため、持続可能な平和の維持に参加するためには、平和構築や紛争解決に関連する知識を深める必要があります。

しかし、平和構築や紛争解決、そして持続可能な平和の授業について学ぶ若い学生の数は、地域社会の若い学生の総数に比べるとまだ少ないのが現状です。私たちの調査によると、平和について学ぶ若い学生の数が限られているのは、若い学生を対象とした平和プログラムが非常に少ないためであることが判明しました。

カンボジアピースギャラリーの基本的な責任は、若い学生たちがわかりやすく学べるオープンスペースである平和教育プログラムをデザインすることです。現在、私たちは「ピースカフェプログラム」という平和プログラムを作っています。

ピースカフェ・プログラムは、カンボジアの若者たちがカンボジアの歴史を学び、考える機会を増やすこと、特にネガティブな思考に対する意識を高めることに役立つと思います。このプログラムは、宗教の探求、宗教間対話、ジェンダー、その他の平和分野など、国内外を問わず、さまざまな平和構築の分野でポジティブな平和構築の歴史を共有することに焦点を当てています。このプログラムは、カンボジアの若者たちが、平和構築の顕著で革新的なアプローチについて学び、積極的な国家的誇りに貢献することを目的としています。平和構築の様々な分野で活躍する有能なゲストスピーカーを招き、その経験や平和の教訓を、主に若い学生たちに伝えています。月に1〜2回、半日のプログラムを開催しています。また、若者の参加という課題を解決するために、カンボジアの若者が平和構築の経験豊かな平和活動家から直接学び、好きなだけ質問できる、素晴らしいピースカフェのプログラムを作っています。

レリクエリウム (RELLIQUARIUM)

DAVID LESHEM

都会の真ん中にある遊具のブランコの上に戦闘機がホバリングしています。そんな不可解な光景を目の当たりにした時のことをよく覚えています。その不気味な瞬間をきっかけに、私は2018年から2021年にかけて、イスラエル全土を巡る旅に出ました。そうして私は、街や都市に航空機や戦車が設置されているのを発見しましたが、明らかに、この二世紀の間に増えた現象です。

これらの設置物を記録する写真の旅では、多くの疑問が浮かび上がりました。このような設置が行われた背景には、何か意図があるのだろうか？ この現象は、社会政治的に、あるいは世間一般の認識として、何を意味するのか？ イスラエルとアラブ勢力との間の主要な軍事作戦が終わってから数十年経った今日、なぜこれらの設置物が増えているのか？ 一般市民はこれらの設置に賛成なのか反対なのか、それとも単に公共空間に置かれたこれらの兵器に無関心なのか。

本書では、平凡なものを鈍く映し出すようなトポグラフィ写真にこだわりながら、この現象に対するレポートを提供することを目指しました。撮影対象は、原寸大で展示されている大型の生兵器インスタレーションや、住宅街で存在感のあるものだけとしました。自治体の記念館や軍事博物館のインスタレーションは撮影を控えました。この写真集に収録された51枚の写真に添えられたテキストは、このトレンドの起源と成長を記述し、研究することを目的としています。

上の3枚の画像は、2021年のイスラエルのアインハロッドにある戦闘機のインスタレーションの年代記です。このインスタレーションは、3年以上にわたるReliquariumプロジェクトの集大成です。

私はあるとき、戦闘機を設置するために何が必要なのかを、理解することに興味を持ったわけです。

アインハロードの戦闘機設置プロジェクトは、開始から終了まで約2年かかりました。そのための機体の公開には、イスラエル軍参謀総長の直々の承認が必要でした。

請求書は以下の通りです（2021年の数字）。
航空機の費用：無償
設置台座・ベース～20,000ドル
航空機の清掃費用（イスラエル空軍の要求）～25,000ドル
航空機の運搬（特大トレーラー＋警察の護衛、6時間の夜間移動）～80,000ドル
国家交通局シミュレーション費用（運搬交通障害分析）～15,000ドル
料金総額～140,000ドル

設置の日、私は、戦闘機の設置を待っている自治体が、さらに3つあることを知りました。この情報は、この現象が継続的なプロセスであることをさらに証明するものだと思いました。どうやら、毎年少なくとも1機、多い年では3機の設置が完了しているようです。

詳細と*David Leshem*の本の注文へのリンクは本号の*P38*をご覧ください。

翻訳：寺沢京子

©*David Leshem, from the book* Reliquarium (前のページをご覧ください。

ワールド・ハウス・プロジェクト

ウェブサイトより

ワールド・ハウス・プロジェクトは、スタンフォード大学のフリーマン・スポグリ研究所（FSI）が、民主主義・開発・法の支配センター（CDDRL）の一部として立ち上げた新しい取り組みです。このプロジェクトは、キング牧師が「ワールドハウス」と呼んだビジョンにちなんで名づけられました。

数年前、ある有名な小説家が亡くなりました。彼の遺品の中に、未来の物語のプロット案がリストアップされていたのですが、その中で最も強調されていたのが、「かけ離れた家族が、一緒に暮らさなければならない家を相続する」というものでした。これは人類の偉大な新しい問題です。黒人と白人、東洋人と西洋人、異邦人とユダヤ人、カトリックとプロテスタント、イスラム教徒とヒンドゥー教徒など、思想も文化も利害も過度に分離した家族が、二度と離れて暮らすことはできないので、なんとか平和に共存できるようにならなければならない、という大きな家、大きな「世界の家」を受け継いだのです。

このプロジェクトは、視聴覚資料のキュレーション、教材の制作、直接行動プログラムの育成を通じて、キング牧師の予言的ビジョンを実現しようとするものです。キング牧師に関する資料は数多く存在するため、歴史的な映像や音声記録、ドキュメンタリー映画、一次資料など、最も重要で価値のある資料を選別することは困難です。私たちのチームは、これらのリソースの中から最適なものを集め、フレーム化することで、世界の自由な闘いの過去、現在、未来に興味を持つすべての人に、豊かな学習体験を提供します。

また、これらの資料を基に、教室内外で使用できる教材を制作しています。スタンフォード・オンラインと共同で制作した無料オンライン講座「American Prophet: キング牧師の内面と世界観」、キング牧師の人生と遺産に関するポッドキャスト、アフリカ系アメリカ人の自由と社会正義に関するレッスンプラン、現代の世界政治と非暴力的な社会変革について話し合う学生、教育者、活動家による週刊フォーラムなどです。

また、ワールド・ハウス・プロジェクトは、世界各地の社会正義団体のネットワークであるワールド・ハウス・グローバル・ネットワークのコーディネートも行っています。持続的で変革的な変化は、コラボレーションによって達成されるのが最善であるという信念のもと、ネットワークは定期的に会合を開き、注目すべき政治活動にスポットを当て、著名なスピーカーを招き、非暴力、人権、民主主義に関する継続的な会話を促進しています。

2020年に設立されたワールド・ハウス・プロジェクトは、フリーマン・スポグリ研究所のシニアフェローであり、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア研究教育研究所の創設ディレクターであるクレイボーン・カーソン博士が率いています。
https://cddrl.fsi.stanford.edu/world-house

翻訳：寺沢京子

平和のための世界芸術プロジェクト最新情報

KATHERINE JOSTEN

2022年、第15回平和のための世界芸術プロジェクト展示会（隔年開催）の交流活動が行われました。ユネスコ賞にノミネートされた世界芸術プロジェクトは、97カ国165,000人が参加した平和のための国際芸術交流です。200人の地域コーディネーターが運営し、世界の中の自分が住む地域に広めてきました。このプロジェクトの使命は芸術を通して平和の文化を楽しく創造することです。このプロジェクトは、多様性と多文化主義を祝いつつ、「私たちは皆、一つ」という考えを表現しています

最近行われた2022年の平和のための世界芸術プロジェクトには、世界中の大人も子どもも含め、何千人もの人々が参加しました。この交流会のために制作された平和を表現する記録写真が、世界各地の文化の中に暮らしている参加者のみなさんの写真と共に、今、私たちのもとに届いています。現在、ウェブサイト（www.globalartproject.org）の2022年版ギャラリーに掲載する画像をまとめているところです。

平和のための世界芸術プロジェクトは、さまざまな形で人々に感動を与えています。2022年の交換会では、ウクライナの地域コーディネーターが、悲劇を生き抜く生活の真っ只中で、このプロジェクトが希望と友情を表現する方法を与えてくれたことへの感謝の気持ちを語ってくれました。ウクライナの少女と芸術作品を交換した米国の参加者は、こう書いています。

「ウクライナのヤナとパートナーを組むという素晴らしい機会をありがとうございました。平和のための世界芸術プロジェクトでこのような素晴らしい経験をさせていただき、とても気分が高揚し、感謝しています。この経験は、私の人生において常に本当に祝福されたものであり、この困難な年にはなおさらそうでした。」

「みなさんのプログラムのメッセージは、私たちの世界のコミュニティーの中で、つながり、理解、創造性、前向きなコミュニケーションを生み出す上でとても重要です。」

「希望、愛、創造的な喜びと平和を込めて。」

これらは最近私たちが受け取ったたくさんの感謝の言葉の一部分です。しかし、平和のための世界芸術プロジェクトは、世界中のボランティアや参加者による草の根的な活動であるため、1994年の第1回目の交流から、このプロジェクトにエネルギーを注いでくれたすべての人に感謝する必要があります。

2022年の交流会のポスターには、前回の2020年に制作したアートが使われています。私たちは、世界中の人々にインスピレーションを与えるためにこのプロジェクトの交流会で制作されたアートを共有し続けることに、いつもワクワクしています。多くの国の先生方が、私たちのウェブサイトのギャラリーを教室で教材として使用しています。

平和のための芸術作品をもっと見るには、私達のウェブサイト（www.globalartproject.org）のギャラリーをご覧ください。平和のための世界芸術プロジェクトは、2012年よりINMPの会員として活動しています。

キャサリン・ジョステンKatherine Jostenは、平和のための世界芸術プロジェクトの創設者/ディレクターです。プロジェクトとキャサリンの活動の詳細については、www.globalartproject.org と www.katherinejosten.com をご覧ください。

翻訳：赤松敦子

Global Art Project for Peace

学校と世界の平和を創造する

ANNA LUBELSKA

英国で教育や福祉に携わる中で、私は、子どもたちが平和構築に向けて活動することの価値を、学校や家庭支援サービスでもっとアピールする必要があると考えるようになりました。学校で素晴らしい平和活動をしている人たちはたくさんいましたが、私は彼らを集めて、これを運動にしたいと思いました。そこで私は「ピースフル・スクール戦略グループ」を結成し、2012年、学校が平和を促進する場となるための考え方を整理する方法として、シンプルなフレームワークを開発しました。このフレームワークは、相互に関連する4つのレベルで構成されています。

レベル1：個人レベルの平和（生徒と職員）
レベル2：関係性のレベルでの平和（ペア、グループ、クラス全体）
レベル3：コミュニティレベル（学校全体）の平和
レベル4 グローバルなレベルでの平和（学校の周り、そして学校を超えたところでの平和）

私たちは、ヨハン・ガルトゥングが提唱した「積極的平和」の概念に基づき、これを実現しました。積極的平和とは、人間の潜在能力が開花するための最良の環境を作り出すことと説明されています。

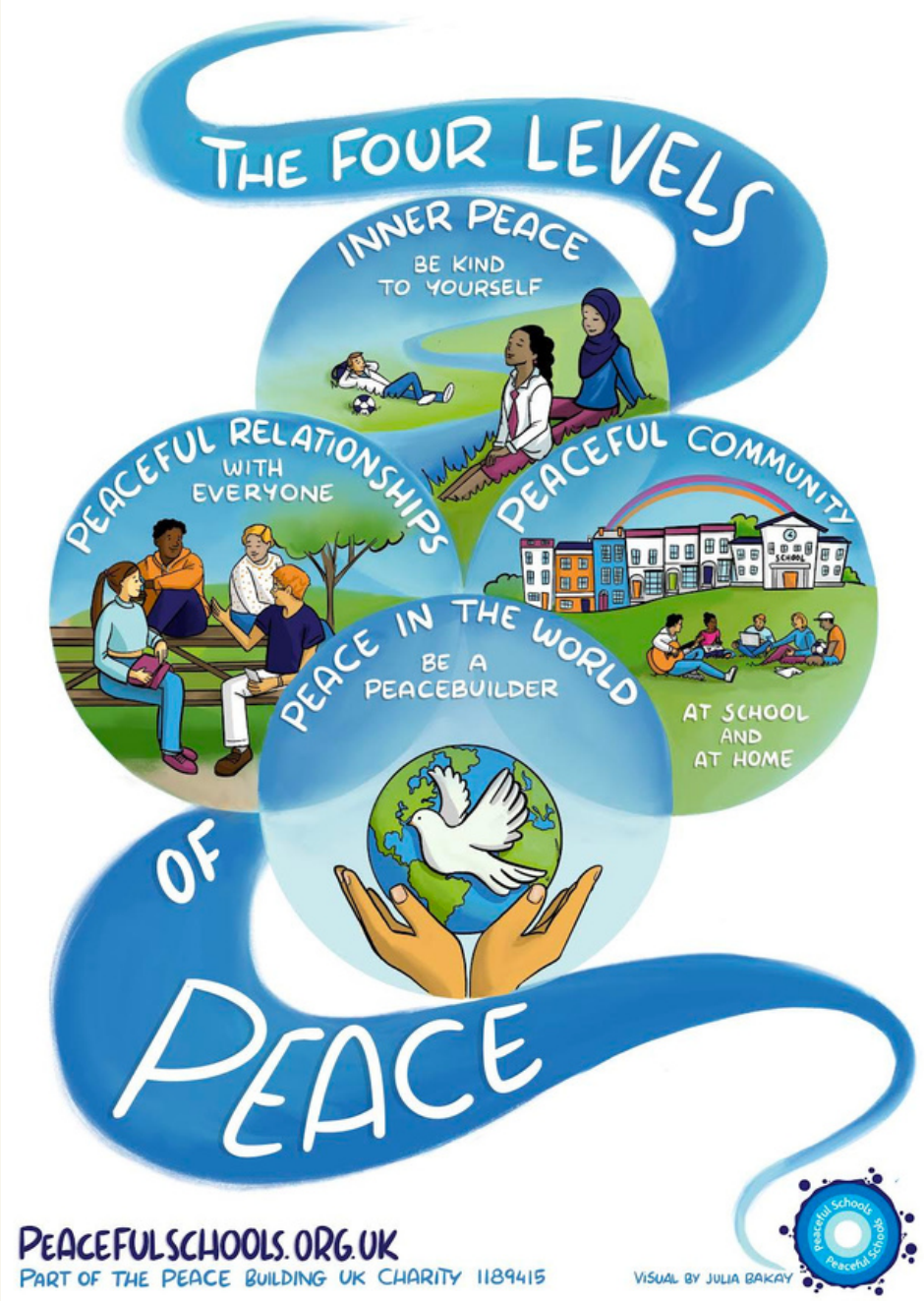
私たちはこのコンセプトを、会議、ピースフル・スクールズのウェブサイト、そして本の中で広めてきました：「平和な学校になるには - 実践的なアイデア、ストーリー、インスピレーション」です。ピースフル・スクールズ・アワード・スキームを通じて、この本の各章を執筆してくれた先駆的な先生方とつながりました。彼らは、平和な環境を作り、非暴力的な方法で人間関係を築き、争いに対処するスキルを学ぶことが、子どもたちや職員にとってどのようなメリットがあるかを説明しています。

2020年、私たちはピースフル・スクールを、仮想の平和博物館を持つ新しい教育チャリティー「ザ・ピース・ビルディング」に導入しました。そのため、私たちは現在2つのウェブサイトを持っています！

私たちは、2枚の美しい平和ポスターを制作しました。一つは小学校の児童と職員向けで、もう一つは中学校の年長者向けです。「平和な小学校」ポスターは、小学校向けに平和の4つの側面を魅力的でわかりやすく表現しています。生徒や職員の内なる平和、平和な人間関係と紛争の建設的な解決、平和なコミュニティ（理念と環境）、世界における平和なつながりという4つの円が重なるように作成しました。

中高生向けのポスターは「平和の4つのレベル」というタイトルで、ティーンエイジャーにアピールできるように工夫しています。内なる平和-自分にやさしく」「みんなとの平和な関係」「学校や家庭での平和なコミュニティ」「世界の平和-ピースビルダーになろう」など、この年齢層の関心に合わせて文言や絵を変えています。このポスターは、ピースフル・スクールズのウェブサイトから無料でダウンロードすることができます。お楽しみに！

*Anna Lubelska*は、*Peace Schools*と*The Peace Building*の創設者です。



ピーススクール、ザ・ピースビルディングによるポスター、前ページの記事参照

世界における平和のための博物館：加筆訂正のお願い

INMPアドバイザー 山根和代

Deadline: June 30th, 2023
Contact: inmpoffice@gmail.com

「世界における平和のための博物館」は2020年に発行され、INMPのウェブサイトから入手できます。https://inmp2020.museumsforpeace.org/museums-for-peace-worldwide
平和のための博物館・美術館の情報など、修正が必要な場合はお知らせください。
また、この本に載せるべき平和のための博物館など、ご意見もお待ちしております。
締め切りは、2023年6月30日です。
お問い合わせ先： inmpoffice@gmail.com
よろしくお願いします。

山根和代
INMPオフィス

リビングピースミュージアムと平和のための博物館国際ネットワークが「トーキングサークル教師用ガイド：アフリカ、ファーストネーション、仏教の平和への視点」を発行

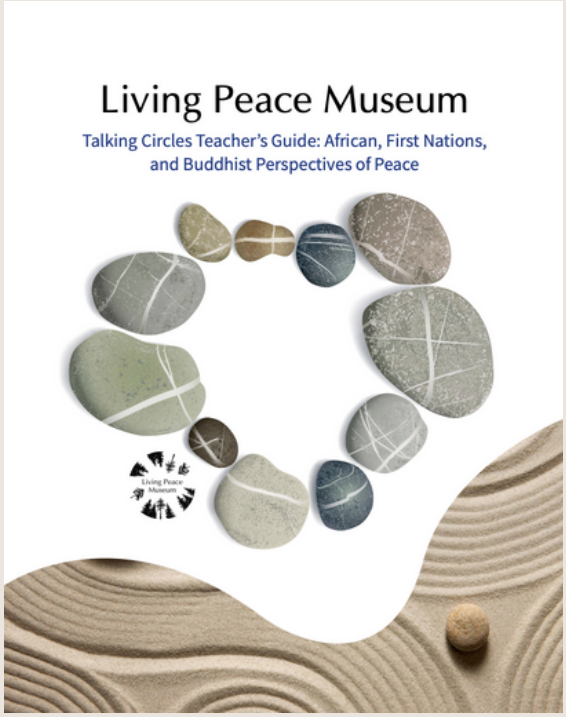
学校での文化的平和教育は、生徒が紛争解決のための社会的スキルを学び、内なる平和を達成し、地域社会や精神世界、自然界を大切にするための重要な基礎となり得ます。カナダのリビング・ピース・ミュージアムは、無料のオンライン・トーキング・サークル・教員用ガイド：アフリカ、ファーストネーション、仏教の平和の視点」を開発しました。それ は、INMPの寛大な資金援助により、文化的平和遺産の伝統に焦点を当てたものです。

教師用ガイドは、アフリカ、仏教、ファースト・ネーションズという3つの多様な文化的視点からトーキングサークルの概念に焦点を当てた、4年生〜7年生向けの社会科ユニットです。これらの古くからの伝統は、長老やコミュニティのメンバーが様々な目的のために円形に集まって話し合うという伝統に基づくものです。会議の目的は、紛争の解決、意思決定、平和維持、和解、癒し、お祝などです。長老たちは伝統的なトーキングサークルを指導し、祈り、儀式、瞑想、聖なるもの、歌、踊り、語りなどを含むことがあります。

このプログラムの目的は、生徒の社会的認識と責任を高めることであり、個人と自然環境の間を含め、人と人とのつながりを認識し、理解し、感謝することです。

andこのように、相互のつながりの絆を作ることで、積極的な個人と文化のアイデンティティ、社会的認識、人と自然環境の間に平和の文化を創造する責任を促すことができます。

トーキングサークルの基本的な目的は、安全で偏見のない場を作り、参加者一人ひとりが話を聞き、話を聞いてもらい、議論に貢献する機会を得て、平和な教室を作ることです。その目的は、生徒が心を開き、互いにつながり、コミュニケーション能力を高めて、教室、学校、家庭、地域社会に平和の文化を創造することです。



詳細およびティーチャーズガイドへのアクセスはこちらをご覧ください。
https://www.peacemuseum.ca/education-resources

RELIQUARIUM：国威発揚と平和についての見解

DAVID LESHEM

このFotoEvidence出版の本は、David Leshemが撮影した、イスラエルの都市環境にある、学校、幼稚園、交通サークルなどにおける、大型生兵器設置の一般的で増え続ける現象についての報告書です。

レシェムの作品は、都市景観にある大型兵器の設置について考察することで、恐怖、安全、国家的誇りの問題を考察しています。

レシェムの写真は、ロバート・フランクの「他人には見えないものを見ることが重要である」という言葉に沿ったものです。トポグラフィーのような写真手法に忠実でありながら、平凡なものを鈍く映し出すような、そんな写真です。これらのインスタレーションはどのような意味を持つのか、一般の人々はこれらのインスタレーションを支持し、あるいは反対しているのか、あるいは公共の場に置かれたこれらの武器にただ無関心なのか、という疑問を投げかけています。

写真を見るには、フレームに収まっていないものに注意を払う必要があります。見る人に与える影響、オブジェを設置した人の意図、つまり感情を揺さぶり、思考を呼び起こそうとしたのか、どんな理由で、どの程度、これらすべてを決定できると判断したのか?

異様な存在感を放ちながら都市の中に消えていく等身大のインスタレーションを描くことで、鑑賞者に文脈を超えた考察の機会を提供しています。このようにして、「Reliquarium」は、イスラエルの公共空間における軍の存在という、市民的な言説ではほとんど議論されることのないテーマについての議論を呼び起こすのです。ある意味で、「戦争の陳腐化」が引き起こされるのです。兵器は、家、道路、車と同じように、日常的な風景の一部として明白に、期待されるようになったのです。

本書は100ページ、写真51枚、カラー写真36枚、モノクロ写真15枚で構成されています。
画像は中判アナログカメラで撮影し、スキャンしてデジタルファイルに変換しています。

©David Leshem, Book Cover for Reliquarium, published by FotoEvidence

ハードカバー、100ページ、16.5×22.5cmの縦長
Copyright 2023 PhotoEvidence. すべての著作権を保有します。
写真の著作権 © 2023 David Leshem
パーソナルエッセイの著作権 © 2023 David Leshem
エッセイ © 2023 エスター・ザンドバーグ
エッセイ © 2023 Nitzan Shahar
ヘブライ語テキストエディター：Yaron David
翻訳： ビバリー・カッツ＆ニル・ザミール
英文編集： デビッド・スチュアート
デザイン： メリケ・タシュクオール・ヴォーン
プロジェクトガイダンス： エティ・シュワルツ
アーティスティックとフォトグラフィーの指導：ガストン・ズヴィ・イコヴィッチ
書籍制作指導： スヴェトラーナ・バチェヴァノヴァ
第1版　ISBN 979-8-9865952-1-4
次のサイトで購入できます。
https://fotoevidence.com/books/reliquarium-by-david-leshem

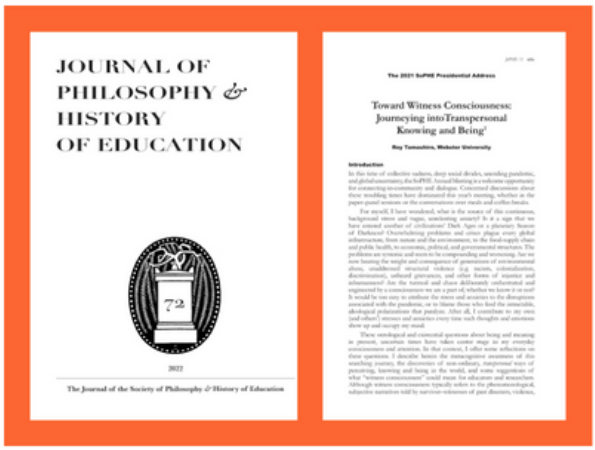
翻訳：寺沢京子

平和のための博物館に関連する新しい出版物

2021年9月、ロイ・タマシロは教育哲学・歴史学会（SoPHE）の会長として講演を行いました。講演は「目撃者の意識に向かって：トランスパーソナルな知と存在への旅」と題し、広島平和記念公園・資料館（日本）、平和と正義のための国立記念館（米国アラバマ州モンゴメリー）、ノグンリ平和公園・記念館（韓国）、済州4-3平和公園（韓国）などの平和記念博物館で体験した非日常の「トランスパーソナル」現象について紹介しました。SoPHE基調講演を基にした全文は、『教育哲学・歴史学会研究誌 Journal of Philosophy and History of Education』2022年版に掲載中です。

また、タマシロが積極的平和を求めて「巡礼の呼びかけ」を行った際の感想、観察、回顧録は、新刊『積極的平和の構築』として出版されています。SoPHE会長の講演で引用された平和のための博物館に加え、タマシロは、1968年にベトナムで起きたミーライ大虐殺の現場であるソンミ記念博物館の遺跡と展示物が、残忍な虐殺の直後から、追悼、和解、平和構築について来館者を教育するために、どのように学芸員によって精選されたかを説明しています

翻訳：赤松敦子



Roy Tamashiro「2021年　教育哲学・歴史学会（SoPHE）における会長としての講演　目撃者の意識に向かって：トランスパーソナルな知と存在への旅」『教育の哲学と歴史研究誌』2022年1月発行72号　): xlix-lx.

Tamashiro, Roy. タマシロ，ロイ．「彼方からの呼びかけ：積極的な平和を求める巡礼の旅」クリスティーナ・ゲイアー・キャンプベル、サイモン・コーデリー編　『積極的平和構築』　ケンブリッジ学術出版刊　2023年　23-47ページに 掲載
https://www.cambridgescholars.com/product/978-1-5275-9331-2.

本記事は、ウェブスター大学（米国）名誉教授のロイ・タマシロ氏から寄稿されたものです。タマシロ氏は現在、国際平和研究学会(IPRA)発行の国際平和研究学会会報の編集長、INMPコーディネーターの特別顧問を務めています。

コレグノ・ピースラボ・ミュージアム（イタリア）ルチェッタ・サングイネッティ LUCETTA SANGUINETTI

今、私たちは懸命に働いています。というのも、コレグノ市の行政は、私たちの小さなピースラボ・ミュージアムを、市の大きな市民図書館が入る大きな建物の中に置くことを決定したからです。このように、私たちは、多くの人が訪れ、魅力的な博物館と図書館を作ることができることを望んでいます。修復作業はすでに始まっており、私たちの協会のコミットメントは、私たちが開発したいいくつかの最初の章に従って、常設展示のある建物の1階部分の配置を担当することです。

1. 移住：イタリア、ヨーロッパ、世界における移住の流れを分析し、最も効果的であると証明された解決策を特定し、新しい地方、国、国際的な移住政策を提案します。海岸沿いの出発を管理し安全な人道的回廊の確立、受け入れ可能性の想定と分散管理、家族全体の移動に有利なだけでなく、若い単独労働者の解決策も組織化し、壁や拒絶を避けるための解決策です。いくつかの例を挙げると、カラブリア州のリアーチェの例：過疎化の一途をたどっていた村が、海からやってきた移民たちによって再び活気を取り戻したこと、ベルガモでは、若者をボランティアや仕事の世界に送り出すためのモデルハウス・スクールを開設していることなどがあります。
象徴的なものとして、シチリアで見つけた本物の移民船があります。

IN COLLEGNO！新しい平和博物館・平和研究所の敷地の前での移民船

2. 軍備：イタリアと世界における現在の戦争の可能性と、危機と戦争を助長し、核の破局を脅かす、さらに洗練された軍備の生産、開発、貿易で豊かになる政策と経済を非難する。
コスタリカの代替選択肢の例。象徴的なもの：ウクライナのマキシビデオ

3. マフィア：世界とイタリアで発生したマフィア組織を特定し、そのツール、主唱者、実践と方法を示す。反マフィア組織の特定と、彼らの非暴力闘争の成功例を示す。象徴的なもの：銃弾で破壊され穴が開いた車の残骸。

4. 平和都市：識別基準：政治、都市、社会、組織、理論、具体。達成すべき目標と、それを実際に達成するための行政手段。世界とイタリアで平和を目指すことを宣言した都市の特定と記録。
コッレーニョ(Collegno)：達成された目標とまだ達成されていない目標を測る温度計。象徴的なもの：平和都市を示す大きな温度計。
これは、今、私が携わっている仕事のほんの一部分の痕跡です。少しでも可能になることを願っています。

翻訳：寺沢京子

画像：*Robert Kowalczyk*（以下の引用文とともに投稿されました。

“"永遠に、永遠に、永遠に、固定されたものはないのだから；
大地は常に揺れ動き、光は常に変化し、海は
は、岩を削ることを止めない。世代が絶えることはない、
そして、私たちは彼らにとって唯一の証人であるため、彼らに責任がある。"

- ジェームズ・ボールドウィン（『ナッシング・パーソナル』より）